

國學院大學紀要 第58巻 抜刷
令和2年2月発行

古着に埋葬される自己

—‘Meditations in Monmouth-street’における衣服と社会—

木樽周夫

古着に埋葬される自己

—‘Meditations in Monmouth-street’における衣服と社会—

木 樽 周 夫

キーワード

ディケンズ 『ボズのスケッチ』 衣服 ロンドン ヴィクトリア朝

序論

衣服が着用者を占拠するという、個人と衣服の主従関係の反転を *Sketches by Boz* (Charles Dickens, 1836) に収められている ‘Meditations in Monmouth-street’ に読み取ることが出来る。冒頭で当時の事実とは異なって描かれるモンマス通り (Monmouth-street) とホリウエル通り (Holywell-street) が、この作品の瞑想世界と現実社会の境界を曖昧にする装置となっていることを確認する。そのホリウエル通りに登場するユダヤ人とモンマス通りの挿絵にのみ登場するユダヤ人を比較することで、この作品が衣服や外見に潜むステレオタイプの当時の社会をあぶり出していることがわかるだろう。彼らの登場が当時の社会における衣服と着用者の関係について読者に注意を向けさせる機能を果たしていることを検証する。

衣服には当時の社会にある偏見や先入観が反映され、その衣服が時には個人の人生に大きな影響を与える様子を、この作品に登場する1人の少年の生涯に見ることが出来るだろう。衣服によって社会的に評価される個人とその人物の本質が一致しないことをこの少年は露呈する。衣服は社会的な力を着用者に押しつけ、着用者はその衣服をまとっている限り、衣服が持つ拘束力から逃れられず、着用者が望まない社会のシステムへと帰属させられる。その結果、着用者と彼らの社会的身分の不一致が生じる。衣服を社会のシステムまたは個人に対する圧力の表象と考えると、この登場人物の転落人生も衣服に起因することが推察できるだろう。モンマス通りの古着から誕生する少年の転落人生に注目し、社会的機能を持つ衣服とその着用者との関わり方を考察する。

この作品は目に見えない避けがたい社会的要因を衣服という目に見える物質に変換させ、衣服によってその人物までもが評価される世界を風刺的に描写する。外見から予見され、決定づけられる登場人物の惨めな人生は、当時の人々のステレオタイプの社会を批判するように展開していく。また、登場人物の墮落していく人生を期待するような作品の鑑賞方法にも疑問を投げかけ、読者に新しい読みを模索させる。当時の社会の一部を衣服に表象させ、それにまぎれて本質が失われる、または本質を見間違える人たちがいる時代への危惧を表明する作品であることを証明する。

1. モンマス通りとホリウエル通り

冒頭で、この物語の語り手のボズ (Boz) はモンマス通りを「古着にとって正真正銘の唯一の中心地」であり、「その古さから敬うべき場所であり、またその有用さからも立派な場所」で、そしてそこが「格別な愛着」のある場所 (74) であると、「軽蔑すべき」ホリウエル通りとは対照的に紹介する。しかし、当時これらの通りに違いはなかったようである。ボズにはこの2つの通りを比較する他の意図があったと考える必要がある。Lynda Nead の説明によると、「19世紀半ばのホリウエル通りは露天商の様子を呈していた。店の中からあふれ出た展示品が外壁や舗道を埋めつくし、古着や中古の家具類、版画販売でひしめき合っていた」(Nead 174)。Christopher Hebert も「ペティコート・レーンとローズマリー・レーン (Petticoat Lane and Rosemary Lane)、ホリウエル通りとモンマス通りとも古着商の中心地」(Hebert 218) であったと、これらの通りを古着を扱う地域として取り上げている。さらに Jerry White によれば「モンマス通り全域とセブン・ダイアルズ (Seven Dials) は悪名高い場所」(White 56) である。このことから、ボズが肯定的な表現を用いて描くモンマス通りと批評家たちが指摘する実際の2つの通りに明確な違いがあることが読み取れる。

ホリウエル通りにのみ言及されるユダヤ人の存在に、この作品のモンマス通りとホリウエル通りに違いを見ることができる。ボズはホリウエル通りを、「とても嫌なことだが、赤い髪に赤い頬ひげをはやしたユダヤ人がむさ苦しい彼らの家へと人を無理矢理引き込み、本人の意志にかかわらず一揃えの衣服の中にその人を詰め込む」(74) と、ユダヤ人に対する偏見とも取れる表現を使って説明する。しかしここでは彼らの古着の扱い方に注意すべきであろう。ユダヤ人に限らず、当時の商売方法としては大量の古着などが出回り、機械的に売りさばく手法は珍しくなかった。J. C. Flugel は「ヴィクトリア朝では比較的に人工的な物を多く使用する傾向のある時代であり、そのため身体的な自然さにほと

んど注意は向けられず、たとえ美しくないとしても、相当量の衣服が登場してきた」(Flugel 158) と指摘する。この作品はユダヤ人を含めた古着屋の商売方法や、大量に消費されていた当時の古着や衣服の扱い方に疑問を呈していると考えるべきであり、ユダヤ人の存在を理由にホリウエル通りを蔑んでいるとは言えないだろう。

一方、モンマス通りの古着から人物が生み出されることは、衣服には身につける役割以上の機能をもつ可能性を示す。ボズは古着を見て「まるで羊皮紙に、ある人の自伝が大きな文字で記されているのを目の前で見るかのように、衣服にはその人物の全生涯が読みやすく記されていた」(75) と、衣服を不特定多数の人物に機械的に売りさばく当時の流行に反し、古着に特定の着用者の存在を認めている。しかし、肯定的に描かれるモンマス通りでボズが衣服によってのみ着用者を特定することが、ある個人の生涯を一方向的に決定づける強制力のある行為であることを露呈する。着用者の社会的身分を恣意的に決定してしまう衣服の機能に注目すべき作品であることが冒頭で表明されている。

2. ステレオタイプ

ホリウエル通りのユダヤ人の描写はこの作品に彼らに対する偏見があると読者に思わせるだろう。Harry Stone は彼らの悪印象を生み出した原因について、「ヴィクトリア朝初期の人々は『パンチ』のような風刺雑誌から影響を受けてユダヤ人に対する強い疑念を持つようになった」(Stone 227) と分析する。この作品も当時の慣習に従い、読者を物語に誘い込むためにユダヤ人を描いていても不思議ではない。ホリウエル通りは「ユダヤ人の街になり、見苦しい反ユダヤ主義の彼らに対する新たな悪評を生み出した」(Nead 174) 場所でもあった。ステレオタイプのユダヤ人の登場は、読者を物語に引きつけるための仕掛けとして読み取れる。

しかし、ユダヤ人を非難するためにその対照的な場としてのモンマス通りが作品の舞台として選ばれたとは言えないだろう。ユダヤ人の商売は「セブン・ダイアルズのモンマス通りからホワイトチャペル (Whitechapel)、そして特にハウズディッチ (Houndsditch) やカトラー・レーン (Cutler Lane) やペティコート通りで行われていた」(Tambling 60) と Jeremy Tambling の調査にあるように、モンマス通りにもユダヤ人がいることは当然のことと考えられていた。実際、作中のジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank) のモンマス通りを描いた挿絵にもユダヤ人は登場する(図1)。Stone は、「ディケンズは初期の作品でユダヤ人のステレオタイプの視覚的表象を認めている。古着商の Moses Levy はめかし込んだドレス、『東洋的』な目、かぎ鼻、太った妻、怪物のような



図1

鼻を持つ子供、といった特徴とともに描かれる」(Stone 229)と説明する。この指摘通り、挿絵の左端に 'Moses Levy' という店があり、その夫婦と娘にこれらの特徴がある。実際、ユダヤ人家族の「モーゼス父子商会は1832年にイーストエンドに開店」(Picard 164)している。この物語がユダヤ人を嫌い、彼らを避ける態度を示すのならモンマス通りにはユダヤ人はいないはずである。

ユダヤ人に否定的な印象を持つ読者なら挿絵にも注目し、彼らに対する偏見や差別的批判がこの作品で展開されることを期待しただろう。E. J. Hobsbawm は「『目に見える』民族性は、自らの集団よりもたいてい『他者』の集団を定義するために用いられることから、否定的になりがちである。だから人種をステレオタイプ的な表現を用いて表す(たとえば『ユダヤ人のような鼻』)」(Hobsbawm 66)と述べる。ユダヤ人への差別的態度はユダヤ人という共同体に向けられるものである。この物語は当時の人々が彼らに抱くそのようなステレオタイプ的な発想を批判する装置としてユダヤ人を登場させる。そのような当時の

社会の態度を彼らが扱う衣服に投影し、集団や社会が個人を埋没させる例として衣服の持つ社会性にボズの目は向けられていく。個人の衣服に向けられる社会的評価とその個人の本质とを同一化すべきでないという語り手の主張が読み取れる。

一般的に、衣服と着用者との関係には相互に同一性があると考えられる。衣服がその個人を表象し、その個人は衣服を用いて自己を表現する。そのため、ボズの瞑想も古着から着用者を登場させ、その登場人物が自分の意志で生き方を決定すると思わせる。しかし、衣服と個人との関連性が認められない場合もある。Joanne Entwistle は 'The Dressed Body' の中で、「身体が衣服を身につけていると考えるか、もしくは服が自ら立ち上がりあたかも身体の助けなしに話でもしようとしていると考えるかである」(Entwistle 36) と衣服とそれを着る個人の関係が乖離する可能性を示し、主体が衣服にあるか着用者にあるかという問題を提起する。ボズは店頭に並ぶ古着からその個人を特定するが、主体が衣服にある場合、着用者の本質が無視され、その衣服に向けられた他者の視線によってその人物の生き方が決定づけられる。ボズはモンマス通りでこの一方的で暴力的な行為を行うことで、外見によってその個人が評価される社会への皮肉を示している。

古着から人物を誕生させることはその個人の価値を外見に依存する行為である。ボズはそのような行為を慣習的な社会の象徴として古着に反映させる。古着は「以前の着用者の流儀や生き方(mode)をたどる。古着の存在は以前そこにいた誰かを知ることである。(中略)そこには新鮮さはないだろう」(Tambling 60)。当時の読者なら馴染みがあったであろう、登場人物の直線的な墮落人生というホガース的な物語展開をこの作品も予期させる。しかし、他者を外見で判断し、その個人の悲惨な生涯を期待する慣習的な読みから脱却すべきであるという主張が古着を「埋葬」(74)するという表現に読み取れる。この作品は慣習的な物語展開への抵抗を示し、新たな読解の可能性をも要請する。

3. 評価される衣服

瞑想として呼び起こされる世界は架空であり、そこでの出来事は現実世界で起こらないことだろう。モンマス通りは「かつて活躍し、亡くなった人の広大な森」であり、そこには「故人の服、ズボン、そしてほどなくして遺品となった派手なチョッキ」(75)がある。そのような古着から誕生する少年はすでに架空の存在のはずである。Juliet Ash は「現代の芸術作品において、衣服は常に商品化を意味するものとして表現されるか、もしくは、感情を表す手段として絵画に描かれた衣服では、人間の姿を描かずに、かつてそこにあった人間の体が出出されるかである。後者では、絵の中にいま現在『生きている』衣服が以

前の着用者の記憶を示す。つまり広い意味で死の世界にいる命が描かれる」(Ash 128)と論じる。古着から誕生する少年の人生は架空の物語でなければならない。読者もまた冥想という言葉から実際には起こりえない物語の展開を期待しなければならないはずである。しかし、彼の墮落していく生活を誰もが予見できる点に現実社会の問題が反映されている。

モンマス通りの古着は、その膝の部分には「ロンドンの街の子供特有のふくらみ」があり、「小さな通学学校」に通ったためにそこは「床にこすり白く」なっている少年が誕生する。「お金に余裕のある身分」ではなく、この少年が成長し次に着たものからは「流行ものではあるがだらしがない」ことがわかり、それは「怠けてぶらついていたことや不良仲間を暗示する」(76)。その結果、この衣服から彼の「監獄、有罪判決-流刑または絞首台」という結論に至る。ボズは最終的に「私たちにはこの物語の結末を知る手がかりはないが、それを推測することは簡単」(78)だと判断する。ここで衣服から得られる情報は彼個人ではなく、「通学学校」、「不良仲間」、そして「監獄」などの社会的なシステムである。この少年が身につけるものは本人の意志にかかわらず、彼を特定の社会の一員になることを強いる。そして、衣服によって一方的に個人の人生を「簡単に推測」できてしまうことにこの作品は疑問を投げかける。

この作品では個人の周辺の事情が強調され、個人の本質は無視される。ボズはこの少年を取り巻く環境を描出することで、個人の本質が必ずしもその個人の存在する社会に適応しないこと、また個人が衣服によって個人の本質ではなく、衣服にふさわしい世界へと紛れ込む可能性を暗示する。Entwistleは「衣服は身体の周縁にあり、自己と他者、個人と社会の境界線を示す」(Entwistle 37)と、衣服は着用者個人とその個人が属す社会の両者に接触するとしながらも、個人の存在が衣服で切り離される可能性に触れている。個人は衣服を身につけることで、この相反する要素を1人で共有することになる。衣服から1人の人物が作り上げられるが、彼のいる場所が彼にふさわしい世界とは限らない。この作品では衣服が着用者個人と社会的身分とを切り裂き、衣服が接する社会に目が向けられる。衣服を身につけることは着用者が意図しても、しなくても社会的な力を身につけることになる。ボズは個人が衣服によって本質を喪失し、衣服の外側にある社会のシステムに飲み込まれる世界を批判的に描く。冒頭のモンマス通りの人々に対する「彼らの住居は外見を気にせず、居心地のよさを考慮しない点で優れている」(74)というボズの言葉は、外見に依存して自分の社会的立場を優位にしようとする人々への皮肉と言ってもよいだろう。

衣服から誕生するこの少年は、外見によってその個人の本質とは無関係の、本人の意図しない社会に機械的に引き込まれる。彼にそのような人生を歩ませるのは彼の衣服から彼

の人生を推測できる社会であり、予期する読者でもある。彼は衣服の力を一方的に受け、自らの本質を喪失し、または放棄させられ、衣服に見合う社会に飲み込まれる。衣服から人物を生み出し、その人物の社会的身分を断定するボズの態度そのものが当時の社会の暴力的な行為を象徴する。外見によって着用者を判断することが適切でないことは冒頭のユダヤ人の扱いで示されていた。この物語は瞑想であるはずだが、誰もが「推測」できる現実社会の問題点を反映し、個人が衣服や外見によって一方的で断片的な評価を迫られる社会の在り方への批判を展開する。

4. 反転する瞑想

衣服と着用者の主従関係は表裏一体であり、衣服の作り出す境界線は世界を反転させる可能性を秘めている。通常、着用者はある場面にふさわしい衣服を選び、その社会や共同体に参加するだろう。Kaiserは「スタイルはある世界に存在する、もしくはふさわしくなるというディスコースに参加する手段になる。その世界に向かい、日々外見のスタイルは抵抗と同様に希望も示しているかもしれない」(Kaiser 86)と分析する。確かに、衣服は社会に参加する有効な手段であり、また参加する社会を選択する装置にもなり得る。しかし、衣服を手段として使うことができなければ、衣服が着用者の意志とは無関係にその人物の属す社会を決定する恐れがある。いずれの場合でも衣服は社会を表象し、着用者個人とは無関係に機能し、個人をある社会の中へと埋没させる。

モンマス通りに登場する少年の生涯は瞑想世界ではなく、ボズが実際に目にした当時の社会を映し出すものだろう。そこではその少年の衣服の乱れとともに社会的身分もまた変更を余儀なくされる。少年の「着古されたスーツは(中略)色あせ、すり切れて」いる。そして、少年の衣服が「流行ものだがだらしのない」ものになると、母親の「慰めはたちまち消え」(76)、彼は母親に「残酷な脅し」(77)をするようになる。そして彼の死が「すり切れた綿のネックチーフ」や「粗い筒型のフロックコート」で暗示される。この少年の末路を決定づけるコートについてボズは、「私たちはそのコートを想像することが出来た——想像、いや見ることが出来た。それを我々は何度となく見てきたのだ」(76-77)と述べ、この光景がすでに瞑想ではなく、当時の人々が実際に見た社会現象であることを暴露する。ボズが何度も「見た」という、これらの出来事に疑問を持たない読者、また読者に疑問を抱かせない当時の社会の不気味さがこの場面に投影される。Geoffrey Hemstedtは「衣服はある種の社会的な死を示す場合もあれば、それを身につける個人のアイデンティティを維持するものにもなる」(Hemstedt 222)と指摘する。確かに、息子の素行は乱暴であるが、

彼をそのような行動を取るように強要するのは彼の衣服だろう。もしくは衣服にそうさせた当時の社会でもある。衣服はある社会的身分をそれを身につけた個人に押しつける。衣服は個人の社会的アイデンティティを維持する一方、個人に社会的制裁を加え、死をもたらす危険性を孕んでいることをこの少年の生涯は指摘する。

誰もがこの少年の生涯を衣服から推測し再現できることから、この少年は瞑想世界の人物ではなく、当時の社会に存在する人物の表象と考えられる。つまりボズは瞑想に失敗している。全19段落で構成されるこの作品の第4段落では、人々は街頭に遺されたコート、ズボン、チョッキ、靴などが「呼び起こす思索に耽ることを好む」(75)とボズの瞑想の手順が紹介される。第5段落で再び彼は瞑想に耽ろうと「先日もこのように瞑想に入り、想像上の人物に、実は2サイズも小さい編み上げ靴を履かせよう」(75)とする。この時ボズは履物で瞑想を始めようとするが、2サイズも大きさの違う靴は彼の瞑想の失敗を物語る。第4段落では靴は「それらにぴったり合う足を見つけてバタバタと歩き出す」(75)と、想像上の人物たちの誕生が靴のサイズと密接な関わりがあることが示されており、サイズの合わない靴からは瞑想世界の人物が登場しないことが分かる。その時に、店先にある「数着のスーツ」(75)が目に入り、例の少年が誕生する。そして第13段落になってやっと「話を先に進めて、本来の楽しい思索の調子を戻して、空想上の足に地下の棚いっぱいのブーツや靴を履かせ始め」(78)、中断していた履物による瞑想を再開する。第5段落から第12段落まで続く、数着の古着の組み合わせから推測されるたった1人の少年の落ちぶれていく生涯と、第13段落から第16段落のわずか4段落の間に履物から次々と生み出される陽気な5人('a market-gardener', 'a coquettish servant-maid', 'a very smart female', 'a very old gentleman', 'a young fellow')の人物と「たくさんのブーツや靴からなるバレエ団」(79)と、その背後で「賑やかに流れる手回しオルガン」(80)は同じ瞑想の産物と考えるにはあまりにも対照的だろう。また履物から登場する人物たちは社会的制度とは結びつけられていない。この物語は瞑想部分とそうではない部分のどちらをもあたかも瞑想であるかのように描き、社会批判を物語の中に編み込んでいる。

この少年の生涯は彼自身の個人的問題ではなく、当時の社会問題として提示されている。当時の人々が彼の人生を推測出来ることは、このような現象が現実の社会で起こっていたことを露呈する。Penelope Byrdeは19世紀では「外見はファッションだけでなく社会的エチケットというルールによっても規定され」ていた。そして衣服による社会的な適正さという「慣習的な理解は中・上流階級では社会的義務と考えられていた」(Byrde 110)と報告する。この作品の親子が社会的ルールや適正さから外れることで、彼らには下層階級の生活が押しつけられる。Kaiserは「外見を気にすることで、個人は境界認識を探る

ことができる。そして自分たちが何者であるか理解する」(Kaiser 89)と指摘する。ここで理解出来るものは自分が社会的に何者であるかということであり、同時に個人は衣服によって社会的に何者にでもなれることになる。つまり、衣服はその衣服が象徴する共同体に個人を埋没させる。冒頭のユダヤ人はこの点に関して重要な役割を果たしていた。彼らは当時のロンドンではユダヤ人という社会的な共同体ではあるが、それは個々人のユダヤ人とは関係がなかった。それは嫌味に描かれるホリウエル通りのユダヤ人とテキスト中には言及されないがモンマス通りの穏やかな人たちの一員として挿絵の中に密かに登場するユダヤ人家族の対照的な描かれ方に現れていた。この物語は外見によって人の生涯を予見でき得る社会と、またそのような社会を当然のことと受け止める当時の人々も非難する。

ボズは「モンマス通りはずっとファッションの埋葬地である。そして、現在の様子から判断すると、埋葬するものがなくなるまで、モンマス通りはこの状況を保ち続けるだろう」(74-5)と述べ、まだしばらく埋葬すべき慣習が続くことを懸念する。衣服が見る者に抱かせるステレオタイプ的な概念、つまり外見によって登場人物の生涯と物語展開までもが決定づけられるような流行を古着に投影させ、その古着を「埋葬」する場所として、「敬う」べき「立派」で「愛着」のある場所がこの作品に描かれるモンマス通りである。

結論

この作品は特定の人種や当時の社会的落伍者を当事者の問題として捉えるのではなく、外見によって人の生涯を判断する慣習的な社会からの脱却を促すものである。冒頭の2つの通りとユダヤ人の描写は冥想世界と当時の社会とを混乱させる仕掛けとして機能していた。ユダヤ人の登場は差別的態度を読者に意識させ、外見がその個人を表象するという慣習的手法によって書かれた物語であると思わせる。またボズは店頭の衣服から人物を生みだし、彼の外見から社会的に墮落する人生を暗示し、最終的に彼の母や家族までも死なせる。しかし、冒頭のユダヤ人は読者を物語に引き込むための装置であり、実際は個人と外見に直接的な関係がないことを示していた。少年の墮落人生を描くが、この物語は彼の生涯のステレオタイプ的な物語展開を当然のこととして受け止める当時の社会に疑問を投げかけ、外見から個人の人生を推測することが当時の社会における理不尽な凶暴性を伴う行為であることを指摘する。衣服によって人物が評価されるステレオタイプ的な当時の社会を古着に反映させ、外見からその人物の社会的身分を断定する従来の思考過程の危険性を示唆する点で、この物語は特筆すべき作品である。

ボズはこの作品でモンマス通りとされる架空の場所から現実社会を眺める。ボズは冥想

について「われわれは遺された衣服が呼び起す思索に耽ることを好む」(75)と言及するが、第13段落の冒頭の「本来の楽しい思索の調子」(78)に戻るといふ彼の言葉からも、この少年の物語が好ましくないことは明らかである。この作品のタイトルが「瞑想」であることから、この物語はボズの作り話として読まれるが、数着のスーツから誕生した少年の物語が、ボズが実際に目を見た社会であることはボズ自身が作中で述べている通りである。ファッション／流行によってその着用者の人生が判断され、彼らがある社会に帰属させられることは、個人がその社会に埋没することである。ボズは古着から簡単にその着用者の貧困と死という結末を予見できる社会と、個人が外見によってその個人とは無関係な社会に転入させられる世界をこの作品でモンマス通りとされる場所に埋葬する。ボズは登場人物の外見から、その物語の展開さえ予測出来る慣習的な読みをも問題視し、それを古着に反映させこの作品に閉じ込める。当時の慣習をファッションとして取り上げ、そのファッションを「埋葬地」と表現される古着屋街に陳列することがこの物語の一番の皮肉である。

引用文献

- Ash, Juliet. "The Aesthetics of Absence: Clothes without People in Paintings." *Defining Dress*. edited by Amy de la Haye and Elizabeth Wilson. Manchester UP, 1999, pp. 128-142.
- Byrde, Penelope. *Nineteenth Century Fashion*. Batsford Limited, 1992.
- Dickens, Charles. *Sketches by Boz*. Oxford UP, 1987.
- Entwistle, Joanne. "The Dressed Body." *Body Dressing*, edited by Joanne Entwistle and Elizabeth Wilson. Berg, 2001, pp. 33-58.
- Flugel, J. C. *The Psychology of Clothes*. The Hogarth Press LTD, 1950.
- Hebert, Christopher. *London*. Penguin Books, 1980.
- Hemstedt, Geoffrey. "Inventing Social Identity: *Sketches by Boz*." *Victorian Identities*. edited by Ruth Robbins and Julian Wolfreys. Macmillan Press Ltd, 1996, pp. 215-229.
- Hobsbawm, E.J. *Nations and Nationalism since 1780*. Cambridge UP, 1990.
- Kaiser, Susan. "Minding Appearances: Style, Truth, and Subjectivity." *Body Dressing*, edited by Joanne Entwistle and Elizabeth Wilson. Berg, 2001, pp. 79-102.
- Nead, Lynda. *Victorian Babylon*. Yale UP, 2000.
- Picard, Liza. *Victorian London*. St. Martin's Griffin, 2005.
- Stone, Harry. "Dickens and the Jews." *Victorian Studies*, vol. 2, no. 3, 1959, pp. 223-253.
- Tambling, Jeremy. *Going Astray*. Pearson Education Limited, 2009.
- White, Jerry. *London in the Nineteenth Century*. Vintage Books, 2008.